

口唇口蓋裂の治療と家族への対応

西宮市・山本歯科医院矯正歯科クリニック 山本 一郎（歯科医師）

口蓋裂の治療は生後間も無くから始まり、青年期に至るまで続きます。最近では高齢になった患者様も多く来院されるようになり、年齢層はさらに広がってきました。この間、医療人のみならず多職種の人がこの治療に関わります。医療分野では小児科医、形成外科医、歯科医、耳鼻科医、言語聴覚士などが関わります。私は個人の開業医ですから、一つの施設内で多職種が関わる治療はできません。

口蓋裂の治療で最も大切なことは、口から食べられ、話すことができるようにすることと考えています。それには、多職種の皆さんの力を貸していただければいけません。そこで私は“診察手帳”なるものを発行しております。この手帳が各科の連携を取ることに機能します。各科の先生が診察時に特記すること、伝えたいことがあれば記入することにしております。この診察手帳は30年以上続いております。

次に、難治症例に対する対応が問題となってきます。難治症例の治療方針は簡単に出ないことが多々あります。このような状況には、カンファレンスで話し合うことにしています。このカンファレンスをKobeカンファレンスと呼んでおります。年3回、私の診療所で行なっております。個々人が治療に難渋しているケースを提示し、患者さまと保護者同席で診察します。毎回20名以上の参加者があり、若手が学ぶ良い機会ともなっております。

Kobeカンファレンスは、もう一つ事業を行なっています。1997年から年に1回、六甲山で1泊2日の、小児患者とその保護者を対象に医療キャンプを実施しています。キャンプには医師、歯科医師、言語聴覚士など医療従事者のみならず、成人患者がボランティアスタッフとして参加しています。キャンプ中に、診察室ではできない医師と患者の情報の交換や患者同士、保護者同士のふれあいの場となっています。参加者の個々が得る情報は治療を進めていく上で大きな支えになっているように思います。

キャンプを始めた頃は、全ての作業を我々医療従事者が行なっていましたが、最近は患者の保護者や成人した患者さんが多くの仕事を行なっていただけるようになっています。